



学校と不登校をめぐるインタビューの記録：壁の中の教育が生きた問いに出会うまで

雲財， 啓
中川， 雅道
長谷川， 亜紀

(Citation)

研究紀要：神戸大学附属中等 論集, 9:1-6

(Issue Date)

2025-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100493749>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100493749>



論考

学校と不登校をめぐるインタビューの記録 —壁の中の教育が生きた問いに出会うまで

An interview on school and school non-attendance: How educators raise questions

雲財 啓, 中川 雅道, 長谷川 亜紀

UNZAI Satoshi, NAKAGAWA Masamichi, HASEGAWA Aki

「不登校」と呼ばれる問題について、同一の学校の教職員である教諭、養護教諭、スクールカウンセラーが、不登校の児童・生徒の支援者、不登校の当事者、その保護者に非構成的インタビューを行った。インタビューで語られた言葉をインタビューアーで共有し、協議を重ねる中で、それぞれの言葉でインタビューの経験を、問いの形で表現していった。

A school research team, consisting of two teachers (one of whom is a yogo teacher) and a school counselor, conducted an unconstructed interview on “School Non-Attendance.” The interviewees were two helpers, a student and a parent. The interviewers shared the transcripts of the interviews and reflected on them, with each interviewer expressing “thinking” as a form of questioning.

キーワード：不登校、生徒指導、生徒相談

Key words: School non-attendance, Student guidance, Student counseling,

I はじめに

学校にはさまざまな問題がある。学校に起因していると思われるが、職員として学校で働いていると見えにくい問題もある。不登校は、その代表的なものの一つだろう。不登校に関わって、いじめ、心的不調、自死といった問題圏が、生徒指導、生徒相談の領域として広がっている。しかし、これらの、広い意味で「人間」に関わる問題は、それが重要な問題であると盛んに取り上げられているにもかかわらず、ほとんどのことがわからないままになっている。

さて、本研究において取り扱う「不登校」に焦点をあてて概観する。2024年10月に公開された文部科学省の調査によれば、全国の小中学校で30日以上欠席した不登校の状態にある子どもは、34万6482人となっている。これは、前の年度と比べて4万7000人余り増え、11年連続で増加して過去最多となっている。また、不登校の状況をみると、「学

校生活に対してやる気が出ない」が32.2%と最も多く、次いで「不安・抑うつ」が23.1%、「生活リズムの不調」が23%を占めている。不登校の要因については様々議論がなされているが、未だ明確な答えにはたどり着かない。「現象には必ず理由がある」とは言うものの、子どもたち、および学校あるいは社会において、何が起きているのだろう。そもそも、現象の原因を探り、対策を練ることに、もはや意味はないのかもしれない。現在起きている／表出している現象は、氷山の一角でしかなく、互いに影響し合い、連鎖反应的に生じたものと捉えることができないか。そうならば、今起きている（表出している）現象の理由を探り、アプローチをしても、本質にはたどり着かないのではないか。

本稿は、そういった問題圏に対してアプローチするための、ささやかな一歩である。某県に所在する学校の教職員である、教諭、養護教諭、スクールカウンセラーが、同じ某県に所在し不登校の児

童・生徒を支援する一般社団法人の支援者2名、不登校の当事者、(以下、不登校経験者) その保護者(以下、保護者)に対してインタビューを行った(2024年7月14日実施)。インタビューは非構成的に行われ、文字起こしした後に、インタビューアーの間で対話を重ねながら考察を行った。以下の章では、それぞれの観点からインタビューの考察を行なっている。なお、個人情報を特定できないよう、一部インタビュー内容に差異が生じない範囲で、改変している。

Ⅱ 不登校をめぐる考察

インタビューは、二つの質問「不登校について自身の立場から、困っていることは何ですか?」「学校や公的機関に求めることは何ですか?」をインタビューイー全員に尋ねるところから始め、これらの質問以降は、インタビューアーとインタビューイーが相互に質問を重ねながら、話題についての思いや考えを語り、対話を行った。以下が、その対話についての考察である。

1 不登校はサボリ?

支援者から見える「学校」は、非常に遠い存在である。インタビューの中では、しばしば「壁(塀)の向こう側の人たち」という表現が聞かれた。そこには、学校と支援者との明確な壁がある。

支援者：〇〇(教科A)の先生とか〇〇(教科B)の先生とか、自分が気持ちを寄せている先生がいたりとかして。前に、いじめみたいなのが〇年生の時に、一学年前の時にあった時に、その先生がすごく話を聞いてくれたから、この先生を信頼できると思ってた先生から。本人は頑張ってるんだけど友達関係とか先生関係もしてるんだけど。彼女の登校の感じを見て「サボリだ」って言われてしまって、それが本人はすごいショックで、すごく辛かったっていうのをこの間聞いたんですけど。

欠席がちな生徒は登校している時に、無理をして登校している場合が多い。当人は相当の努力をして登校している時に、信頼関係のあった教員から「サボリだ」といった理解のない言葉を受けることがある。また、それがきっかけになって不登校になる、ということもある。

それぞれの家庭には、それぞれの背景がある。学校に在る間には、家庭での課題は見えにくくなる。家庭でトラブルがあった時にも、無理をして学校に行っている場合がある。しかし、学校で働いている教職員としては、社会に出る場合には社会での姿を伝えてあげることが必要だと考えてしまう。そこで、このような声かけがなされる、ことになる。ここには、特定の人物や職種だけではない、社会のあり方の問題も隠れている。

言葉の感度、寄り添い方、状況の評価の方法に、やはり支援者と教員とでは隔りがある。果たして、学校の教員たちが、不登校や不調の兆候を「サボリだ」と考えない社会のためには、何が求められているのだろうか。

例えば、保健室を頻回に入室する生徒は「サボリ」なのだろうか。「用のない人は保健室に行くな」という指導をされた／したことはないだろうか。インタビューの中で、保健室に対するイメージを問いかけた時、次のような発言があった。

保護者：保健室ってやっぱそういう不登校とか、そういう子のはじめの砦、はじめに行くところって感じですね。

経験者：すごい通ってはないけど。行きづらい時は行ってたかな。とりあえず保健室行っとけばいいかなみたいな感じで行ってましたね。

これらの発言に続いて、支援者が「学校の中に居場所を作る」という風潮に、悪くはないが「ハードルが高い」という発言をしている。これは、子どもの話を聞ける場所があればよい、という考えからの発言であった。学校という枠組みの中の「養護教諭／保健室」は、応急手当や健康相談を通して、子どもの話を聞き、「寄り添う」役割が求められている。しかし、子どもは、何を求めて保健室に行くのだ

ろうか。

2 半日ぐらい寄り添うことはできるか？

支援者たちから学校という組織を眺めたとき、「寄り添う」という観点で大きな隔りがある。例えば、次のような発言があった。

支援者：半日ぐらい、その子に付き合っ
てここにおるとかですね。そんなんしてくれ
たら、そういう時があってもいいんじゃないか
なと思いますけどね。

学校の教員は、生徒の話を半日かけて聞き、生徒に寄り添うことはできるだろうか。このことが難しく感じられるのには、理由がある。教職員の仕事の大半は、大多数に向けての仕事である。30名から40名程度といったクラスという単位から、100名を超える学年といった単位（もちろん、学校、校種、地域ごとに差がある）に対して、授業準備、個別の対応などを行う。あるいは、各種会議の準備や、成績の算出、各種行事の準備など、仕事は多岐に渡る。基本的に、大多数の前で応答する以外の個別的な対応は、別種の技能が必要とされる。それゆえ、抵抗感を伴うことが多い、というのが正直なところだろう。

それでは、反対に、「半日寄り添うことができるか」という問いは何を述べているのだろうか。それは時間的なことを述べているのではなく、それぐらいの時間をかけて、その人の性質、家庭的背景、現在の状態を聞き、言語／非言語で反応し、時には対話し、対応することができるのか、ということだ。

また、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどの「対人援助職」の専門職と呼ばれることの多い立場の職員は、クライアントの性質、家庭的背景、現在の状態のような、個人的事情や資源に焦点を当てることを期待されているように思う。では、その専門職は半日ぐらい相手に付き合えるのだろうか。例えばスクールカウンセラーは、その養成課程で支援する際の枠組みの重要

性や必要性を学び、現場でもその枠組みを適用していく。この枠組みを超える作用はまだ未知であるが、「寄り添う」ということを問い直した時、未知のままでは本当に寄り添うことは難しいだろう。

学校の教職員が、個別の生徒の話を聞き、話し、対応することは、本当にできるのだろうか。

3 学校は行くべき場所？

次の場面は、インタビューアーに対する問い返し
の場面であり、印象的な場面であった。いくつ
かの言葉が交わされる中での質問であった。

不登校経験者：じゃあ、学校に行けてる子は、
学校って行くべきものって思っていないん
ですかね。

不登校経験者の「経験」はまだ過去の経験とな
っておらず、自分自身の不登校の経験を何と
か解釈しようとして、なされた質問だった。
直前にインタビューアーが「不登校ってい
うと危ないかなという子、それが強い子は、
むしろ『学校には行かなあかん』と思っ
てる子の方がすごく強く出る感じがして」
という発言があり、その発言を受けての質
問だった。

もちろん、それがすべてではないが、インタ
ビューアーの発言は例えば、次のような不
登校経験者の声を意識してのものだった。

「ほんとには行きたくないけど、自分の居
場所はそこしかないから、行くべきと考
えており、だから行きたい。しかしも
はや体が動かない」という表現が私
には適切でした（栗田, p. 6）。

学校に行か／けないという現象は、「学校
には行かないといけない／学校には行
きたくない」というアンビバレントな
状態だと説明できる。おそらく、ほと
んどの生徒は、特に意識することもな
く、重い軽いはあれど、学校に行きた
くはないと思っているが、なんとなく
学校に通っている。そこには

深刻な葛藤はなく、理由や根拠がない。

インタビューの発言、「学校に行く人は、行くべきだと思っていない」を問いたず、問わざるをえないというアンヴィヴァレントで、注意を要する質問、こういった場面で、言葉の感度、寄り添い方が問われることになる。ここでは、正解を出すことは求められていない。あくまで、ともに考えること、回答を差し控えること、が求められているとも言えるだろう。

例えば不登校の問題について、それを経験した人と、経験しなかった人が、言葉を交わし合うことで、何かを変えようとする場所を作ることのできるのだろうか。そもそも、相手に「寄り添う」とはどういうことだろうか。

他方、保健室登校／別室登校という不登校支援を行うことがある。また、教育支援センター（適応指導教室）やフリースクール、ICT機器を利用した学習形態等、学校以外での学びを保障する場所が増えている。そして、条件によっては、学校以外の学びの機会をもつことによって、出席日数単位や卒業に必要な単位を得ることができるような制度が整えられた。では、「学校」「教室」という枠組みに登校し、学習する意味／意義とは何なのか。

「学校は行くべき場所？」という問いを考えるにあたり、学校での体験を語った不登校経験者の発言を引用する。

不登校経験者：たしかに学校の授業で勉強して得たものってあんまりないですね。それ以外の、友達となんか喋ったりとか、図書室で本読んだりとか、そういうことの方が身になっているかな。先生と喋ったりとかですね。学校やけど、勉強じゃないことの方が身になっている気がします。

インタビューの中で、学校の中の所属感の話題になり、保護者「逆に、所属したくないのかもしれないね」インタビューアー「学校に戻そうという謎の圧力」保護者「戻そうって思うのはどうなんだろう」インタビューアー「軍隊か何かかないつも思います」支援者「社会で優秀に働けるようする機

関だって、言われてますよね」という、学校の存在意義について、活発にやり取りがなされた。この対話は、「学校って行くべき場所？」を問い直すことを示唆しているのではないだろうか。

4 学校は話ができる場になっているのか？

先に挙げた不登校経験者の発言に触発される形で、インタビューアーが不登校の子どもとその親との関わりを話題に挙げた。不登校に関わる子どもと親のやり取りについてだったが、そのことを受けた支援者の以下の発言は注目に値するだろう。

支援者：子どもが親に対してね、全部喋るかいって、もちろんそうじゃないです。でも、ある程度のことしゃべれてる場合はいいんですけども、そのほとんど喋れてないみたい。この向かう先がね、無いから困っちゃいますよね。（中略）子ども同士でそれをぶつけあうことになっちゃうんですね。それがあまり良くないと思ってて。（中略）大人に言うっていうことが、解決になるかどうかかわかんないですけども。でもその子どもにとっては、その大人に言えてるっていうことがすごく大事だなと思うんです。

人に話すことがいかに重要であるかが分かる。またこのことは、「学校の教職員が、個別の生徒の話を聞き、話し、対応すること」ができていのかどうか、改めて問い直すことが求められているとも言えるだろう。

さらに踏み込んで考えれば、学校組織として子どもが話しても良いと思える場を作ることができるのだろうか。このことに関連して、子どもが様々なことを話せる場の一つに、スクールカウンセラーが行うカウンセリングがある。しかし、不登校経験者は、この場面の後にカウンセリングは「ちょっと苦手」と発言する。その理由はいくつもあり、予告されることなく急に呼び出されたり、誰か分からない人に話をきかれたりと、子どもに不信感が募るようなものだった。

ここに不登校が増え続けている要因が見えるのではないだろうか。チーム学校、多職種連携等、言葉だけが先に走り、学校の組織全体としても子どもの話を聞くような環境は整っているのだろうか。

また、インタビューアーが、「学校の中の保健室」の在り方や生徒対応（とりわけ、「話を聴く」ということ）に関して養護教諭の抱える葛藤、また学校で不安や悩みの有無を答えるアンケートをとっているものの実質的な支援に繋がりにくい（不安や悩みを抱えていると想像されるにも関わらず、アンケートには無記入／無反応である）という発言をしている。これは、先のインタビューイの下記の発言から、「学校は話ができる場になっているのか？」を問い直した結果である。

支援者：その子と向き合う時には、その時間だけはやっぱりその子がどんな状況なんだろうっていう、聴く姿勢とか聴く力っていうか。ただの繋がりだけじゃなくて、その子と向き合う時には、その時間だけはやっぱりその子がどんな状況なんだろうっていう、聴く姿勢とか聴く力っていうか。ただの繋がりだけじゃなくて、その子その瞬間に何かを訴えているっていうことを、ちょっと捕まえるような話の仕方ってしてくれたら、ちょっとでも違うんじゃないかなと思うんですね。

VI おわりに

始まるのが難しい研究というものが、やはりあると思う。

教諭、養護教諭、カウンセラーが集い、不登校や、それに関わる問題圏について、とにもかくにも取り組んでみようという重い腰を上げたのが本論文の始まりだった。当初は、学校で実施しているアンケートをよりよくすることを目指したインタビューだったが、実施した学校教職員がそれぞれに大きな影響を受けることになった。すぐに何らかの実務につなげるのではなく、その影響を問いの形で表現してみることに方向転換し、それぞれに考えたこと／考えていることを言葉に紡いでいった。

この研究はまだ、始まったばかりである。

この論文で表明された問いかけが、生きた問いとして、学校の中で響き続けるためには、私たち教職員が、それぞれの形で問いを引き受け、行動を変えていくことが求められている、と言える。

本論文を始まりとして、今後もこれらの問題圏について、研究を続けていきたい。

注

本研究は、科学研究費若手研究「子どものための哲学をもとにした学校教育の構築——評価を中核として」（24K16679）の一環として行われたものである。また、実施されたインタビューは、附属学校部の倫理審査（受付番号176）によって承認されている。

某県に所在する一般社団法人について付記しておきたい。今回は、論文の客観性のある程度担保するために、法人の名前を伏せている。読者の中で、支援について関心を持ち、さらなる情報を得たい場合は、著者の一人である中川に連絡をとっていただければ、情報を開示することができる。一般社団法人で行われている事業について、論文の内容を理解するために必要だと思われる範囲で以下に付記しておきたい。

法人の概要

開設：2018年3月24日

広さ：37平米 某県に所在する市営住宅2DKの住戸を改装し、大小3つの部屋がある

事業：子どもの社会的場所、学習支援、ダンス教室などの事業を行う

子どもの社会的居場所事業について

理事のひとりが、某県で実施されている子どもの学習支援にかかわる中で、子どものケアに重点を置くことが求められていることを認識した。そこから「子どもの社会的居場所」事業を、法人として運営し始めた。

社会的という言葉に1) 複数の人間がいる 2) 子どもたちだけではなく必ず大人がいる 3) 常におなじ大人がいて子どもたちと密接にかかわる

という意味合いを込めている。大人と子どもがここを居場所として利用しながら交流し、刺激しあう場所である。当法人が、子どもとかかわるかかわり方は伴走型支援に近いかもしれない。支援と言うより子どもの居場所に居続けている大人、という感覚である。

文 献

- 石隈利紀, 家近早苗 2021. 『スクールカウンセリングのこれから』 創元社.
- 菊竹智之 2014. 「吸血鬼の棺」『臨床哲学のメチエ』 21号.
- 栗田隆子 1998. 「不登校を語ること——不登校の『私』性」『臨床哲学のメチエ』 創刊号.
- 「月間生徒指導」編集部編 2023. 『生徒指導（改訂版）全文と解説』 学事出版.
- 寺田俊郎 1998. 「誰が『なぜ学校に来るのか?』に答えられるか」『臨床哲学のメチエ』 創刊号.
- 畑英理 1998. 「『学校』という踏み絵」『臨床哲学のメチエ』 創刊号.
- 文部科学省 2024. 令和5年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について
https://www.mext.go.jp/content/20241031-mxt_ji-dou02-100002753_1_2.pdf (2024.11.3 閲覧)